

【2019年2月28日発行】

THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES

日本国際文化学会ニューズレター41号

<http://jsics.org/>

日本国際文化学会事務局

多摩大学
グローバルスタディーズ学部事務室内
〒252-0805
神奈川県藤沢市円行802番地
Tel: 0466-82-4141
Fax: 0466-82-5070
Email: jsics@gr.tama.ac.jp

つながりは深く、すそのは広く:感謝の気持ちを込めて

日本国際文化学会会長 岩野 雅子



新しい一年が幕開けしました。日本国際文化学会においても、4月1日より新たな役員体制へと移行し、国内のさまざまな諸行事に合わせるかのように、新体制が船出してまいります。

この2年間、会長として学会のみなさまに大変お世話になりました。またそれに先立ち、事務局長4年間をお任せいただきましたこと、あらためて御礼申し上げます。学会ファースト、会員ファーストの精神で、できるだけ多くの方々にメリットを感じていただけるようにと工夫をしてきましたが、まだまだというところで次の馬場孝新会長にバトンタッチすることになります。学会ウェブサイト、ニューズレター、年報、会員メーリングリスト、全国大会、研究会、学生・大学院生向けのプログラム、学会事務局体制等と、歴代の会長、事務局長、各種委員や現委員などの発案でずいぶん様変わりをしてまいりましたが、まだ手を入れるべきところがあると話し合いつつも、将来の課題として積み残したものも少なくありません。

次は創立20周年を前に、成熟期に向かう大切な2年間となります。思慮深く丁寧な仕事をされる馬場新会長のもとで、若手の倉真一副会長、菅野敦志副会長がこれまでにない、想定を超えた新たなアイデアを出していただくようにと、先日の引き継ぎの会でお願ひしたところです。時代が大きく変革する「おもしろき」世にめぐり合わせる不思議さを楽しみながら、次の学会の在りようを模索していただければと願っています。

平野健一郎顧問、熊田泰章顧問、若林一平顧問をはじめ、事務局長時代にお世話になった白石さや元会長(顧問)や小林文生前会長(顧問)にも、数々のご助言、ご支援をいただきありがとうございましたこと、重ねてここに感謝の意を申し上げます。顧問には新たに鳥飼玖美子氏、岡真理子氏が加わられました。この学会の良いところは、とんでもない、突拍子もないと思われるような私どものアイデアを育て見守り、軌道修正していただける顧問がおられることにあります。また、常任理事会、理事会、各種委員会のみなさまがしっかりとした議論の上で、忌憚のない意見を自由に出し合ってくださいるので、安心して前に進めます。

ここ10年は、所属大学内で国際化推進室、学部、図書館や学術情報センター、大学全体といった管理業務を担い、自分の教育研究に加えて、高等教育開発や大学評価にかかわる世界にも首をつっこむという少し無茶なこともさせていただきました。自分自身の年齢や立場を考えず、履修証明プログラムや資格取得研修などに他大学の若い教職員に交じって参加し、同じように叱られたり、緊張したり、冷や汗をかいたり、笑いあったりするなかで、大学っていいなと心底から感じる瞬間を得ることができました。

日本国際文化学会(The Japan Society for Intercultural Studies)においては、国公私立といった異なる形態、異なる学部・研究科等からの会員が集まり、境界(線)ーborder・boundaryーを超えて一つのものを生み出し、達成しようとするダイナミズムを味わわせていただきました。この6年間、そして、貴重な会長職としての2年間は「本当に心から楽しかった」と声を大にして山口の地から世界の四方に向かって叫びたいと思います。木原誠副会長、安田震一事務局長をはじめとする学会事務局のみなさま、松居竜五ICCO運営事務局長には、2年間本当にありがとうございました。

すばらしい会員のみなさまとのつながりを益々深くし、これから会員になってくださるであろう学部生、大学院生をはじめとする多くの方々により広く窓口を広げるには、どのようにすれば良いのか。常任理事会では、そのような議論をしてきたように思いますし、これからも続けていくことになると思います。

「East meets West in Nagasaki--文化の際会、混淆、共生をめぐって

第18回全国大会実行委員長 葉柳 和則 (長崎大学)

会員みなさま、この度、2019年日本国際文化学会第18回全国大会を長崎大学文教キャンパスにて開催させていただくことになりました。会員歴の浅いメンバーばかりによる大会運営となるため、なにかと行き届かないところもあるかと思いますが、みなさまのご協力のもと、長崎までご足労いただくだけの価値のある全国大会にしていく所存です。

第18回全国大会は、長崎の地に身を置いて、国際文化論にとっておそらく永遠のテーマである文化の「際会」、そして「混淆」と「共生」について報告し、討論する場となるはずで、テーマは直接的に東西の出会いから、「他者」あるいは「異他的なもの」ものとの選

近まで多岐にわたることになるはずで、報告と討論を通して、これまでの比較文化論や文化接触論をその高みにおいて乗り越えていく視点、さらには、「文化」概念を再構築してくような議論が現出することを期待しています。

公開シンポジウムの基調講演は、香港大学の王向華先生にFrom Culture as a Code to Culture as Practiceという論題でお話しいただきます。ここではまさに「文化」という私たちにとっての最大の鍵概念の現代の変容について議論されます。基調講演の内容を受けて、公開討論を開催いたします。

第18回全国大会 開催要領

開催日時: 2019年7月6日(土)～7日(日) ※7月5日(金) エクスカーション
開催大学: 長崎大学多文化社会学部(文教キャンパス)

【大会会場への交通アクセス】

〔JR長崎駅から〕 路面電車 「長崎駅前」→(赤迫行き)→「長崎大学」下車 ※乗車時間:18分

〔JR浦上駅から〕 路面電車 「浦上駅前」→(赤迫行き)→「長崎大学」下車 ※乗車時間:9分

〔長崎空港から〕 県営バス 「長崎空港4番乗り場」→(昭和町・浦上経由長崎方面行き)→「長大東門前(旧:長大裏門前)」
※乗車時間:45分

【大会日程】

※自由論題の採択数等によりスケジュールが多少変更されることがあります。

【7月6日(土)】

09:00～ 受付
10:00～12:00 自由論題I
12:00～13:00 昼食
12:10～13:00 常任理事会・理事会
13:10～15:10 共通論題I
15:40～17:00 公開シンポジウム:基調講演
17:00～18:00 パネル・ディスカッション
19:00～ 情報交換会・大学院生交流会

【7月7日(日)】

08:00～ 受付
09:00～11:00 自由論題II
11:00～13:00 昼食
11:10～12:20 総会 平野健一郎賞表彰式
12:20～12:50 ICCO発表会
13:00～14:30 フォーラム
14:45～16:45 共通論題II

※情報交換会・大学院生交流会:(7月6日(土)19:00～)

会場は、長崎の夜景を一望できる稲佐山中腹のホテルを予定。正式予約がまだ始まっていないため、詳細については今後ニューズレター等でお知らせいたします。長崎大学から会場までの送迎はバスにて行います。

※宿泊先:

宿泊については、原則として各自でお願いいたします。大学周辺にもホテルはありますが、長崎駅周辺、または旧市街の方がはるかに豊富な選択肢がございます。なお、長崎大学の宿泊施設、観月荘は諏訪神社電停から徒歩10分の場所に位置しています(<http://www.nagasaki-u.ac.jp/info/kangetsuso/kangetsuhome.html>)。シングルルームで一泊2,500円です(ただし朝食は提供されません)。観月荘にご宿泊を希望される方は、早めに大会事務局までご連絡ください。

※大会参加費・大会申込み:

大会参加費と振込先については、今後ニューズレター等でお知らせいたします。

East meets West in Nagasaki—文化の際会、混淆、共生をめぐって

21世紀に入って、私たちは、グローバル化のうねりの中で、それまで稀にしか、あるいは間接的にしか出会うことのなかった複数の文化が、国家やエリアの境界を越えて、直接に出会い、ときに対立し、ときに混淆し、あるいは共生するさまを目の当たりにするようになりました。国際文化学はこうした現実を解明する力と未来を展望する力を持つ必要があります。

長崎は、近世の初期グローバル化とも言うべき時代に、西と東の文化の「際会」する場となりました。ポルトガル、スペイン、イギリス、オランダとの貿易、キリスト教の布教と弾圧、鎖国体制における出島での貿易、潜伏キリシタンの存在等々、長崎は、西洋と日本との出会いの地として表象されることの多い都市です。しかし、唐人屋敷の遺跡や現在まで存続しているいくつかの唐寺などに見られるように、長崎は近世における日本と中国との交流の拠点でもありました。この意味で、長崎は西と東の文化が重層的に出会うトポスであったと言えます。現在の長崎の食文化、祭りなどにもその影響は色濃く残されています。長崎にある二つの世界遺産、「明治日本の産業革命遺産」(2015年登録)と「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」(2018年登録)には、ともに西と東の文化の「際会、混淆、そして共生」という要素が含まれています。第18回全国大会では、このような歴史的背景を持つ長崎の地において、国際文化学の現在を確認し、理論と方法を鍛え直し、いっそうの発展に向けた手掛かりをえることを目指します。

共通論題の発表タイトル

※順不同。タイトルは仮題を含む。発表者は代表者のみ明記。

7月6日(土)〈共通論題I枠 13:10~15:10〉

共通論題①「研究者トライアングレーションで見えてくるもの——カザフスタンの英語教育推進事業を事例として」

代表者:岩野雅子(山口県立大学国際文化学部教授)

共通論題②「『暴力』と表象——政治と文化における接合点の模索」

代表者:深松亮太(神奈川工科大学非常勤講師)

共通論題③「グローバル化におけるアジア社会と宗教文化の変容」

代表者:伍嘉誠(長崎大学多文化社会学部助教)

7月7日(日)〈共通論題II枠 14:45~16:45〉

共通論題④「国際文化学としてのフランス文化教育」

代表者:高橋梓(近畿大学講師)

共通論題⑤「スポーツと政治——1934年の第10回極東選手権競技大会から1940年の東京五輪へと至る過程を中心に」

代表者:鈴木裕輔(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)

共通論題⑥「21世紀における中国の周辺外交の考察——一帯一路とソフトパワーを中心に」

代表者:ヌルガリエヴァ・リャイリャ(長崎大学多文化社会学部助教)

エクスカージョンについて

大会前日の7月5日(金)にエクスカージョンを予定しています。長崎の地で本学会の全国大会を開催することの意義を踏まえ、一般の旅行ガイドブックにはあまり記載されていない歴史の痕跡をたどる小旅行にしたいと考えています。現時点では、西洋との交流の前景化の裏面で周縁化されがちな唐寺めぐり、または、遠藤周作の『沈黙』の舞台のひとつである外海(そとめ)地区の潜伏キリシタン関連遺構の訪問を検討しています。金曜日に来崎されるみなさまにとって無理のない旅程になるよう現在調整中です。詳細は今後、学会ウェブサイト、ニューズレター等でお知らせいたします。

大会事務局:

大会実行委員長:葉柳和則 (長崎大学多文化社会学部)

連絡先:〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学多文化社会学部 葉柳研究室気付

e-mail:intercultural_2019@ml.nagasaki-u.ac.jp

2019年度ICCO短期集中セミナーについて

ICCO(文化交流創生コーディネーター資格認定制度) 運営事務局長
松居 竜五 (龍谷大学)

2019年度のICCO短期集中セミナーは、8月25日(日)から8月31日(土)にかけて、京都の龍谷大学深草学舎でおこなわれます。参加者の宿泊先は、深草学舎から徒歩3分のりゅうこく国際ハウスとなっています。参加費は30,000円とする予定です。参加申請期間は2019年4月1日(月)～5月31日(金)(必着)となります。例年通り、参加者には原則として、3人一組でそれぞれのグループのプロジェクトに沿ったフィールドワーク(約3日間)に取り組み、最終日に成果発表をおこなっていただきます。

龍谷大学での開催は、2015、2016年度に引き続き三回目となりますが、御所の西にあった龍谷大学ともいき荘を宿泊先とした前二回とは異なり、今回は大阪など他の近畿圏により近い場所での開催となります。そこで、原則的

に京都市内をフィールドワークの対象とした前二回から、今回は近畿圏(原則として、京阪深草駅から公共交通手段で片道1時間程度以内の範囲)を対象とすることにしています。神戸、大阪、奈良、大津なども視野に入れて、これまでにはなかった文化現象を参加者が発掘してくれることを期待しています。

これまでのフィールドワークの成果については、学会HPに掲載されていますので、参加校のみなさまに、ぜひ学生に参加を呼びかけていただければと思います。また、参加校であるかどうかを問わず、特にお近くの学会員の方々には、期間中に会場にお出でいただき、参加者の活動を見守っていただければと考えておりますので、よろしく願いいたします。

※2019年度日程案 (時間などは若干の変更の可能性があります)

日程	日付	予定	備考
第1日	8/25(日)	15:00 龍谷大学深草学舎に集合 15:00~16:00 オリエンテーション 16:00~17:00 基調講演 17:00~17:30 報告書の書き方講座 18:00 自己紹介および懇親会	
第2日	8/26(月)	9:00~15:00 プロジェクトに関するグループごとの相談・決定 15:30~17:30 課題の発表・説明と修正 (各グループ15分)	必ずこの日のうちに三人で相談して課題と翌日以降のフィールドワークの計画を決定すること。
第3日	8/27(火)	9:00~17:00 フィールドワーク1	
第4日	8/28(水)	9:00~17:00 フィールドワーク2	
第5日	8/29(木)	9:00~15:00 フィールドワーク3	必ずこの日のうちにフィールドワークを終了すること。
第6日	8/30(金)	9:00~17:00 成果発表の準備 18:00 懇親会	成果発表の準備。
第7日	8/31(土)	10:00~16:00 成果発表会 (各グループ20分+質疑応答)	資格審査委員会による成果発表での審査を行います。

○ 太字は日本国際文化学会員が参加

【龍谷大学深草学舎】

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67 代表TEL:075-642-1111/FAX 075-642-8867

交通アクセス JR奈良線「稻荷」駅下車、南西へ徒歩約8分/京阪本線「深草」駅下車、西へ徒歩約3分

京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋」駅下車、東へ徒歩約7分/最寄りのバス停:龍谷大学前

【りゅうこく国際ハウス】

〒612-0029 京都市伏見区深草西浦町4丁目38(龍谷大学深草学舎まで徒歩2分)

http://intl.ryukoku.ac.jp/dormitory/html_j/kokusai_h.html

深松 亮太 (神奈川県立大学非常勤講師)



私は、博士課程に入学してから現在に至るまで政治風刺画が社会に与えた影響について探求してきました。このような研究テーマを博士課程で選択した一つのきっかけは、ここに掲載させていただいた1枚の風刺画であり、私がこの風刺画をはじめて目にしたのは大学2年生の時に受けていた授業でのことでした。この授業を受けるまで私は、奴隷制時代、南北戦争と奴隷制度の廃止、ジムクロー(人種隔離)制度の時代、公民権運動といったアフリカ系アメリカ人の通史を直線的な時代区分で理解しており、一貫して白人とアフリカ系アメリカ人は分断・対立してきたものと考えていました。それ故に、この風刺画が描かれた19世紀末の南部社会において、両人種が共闘を試みていたという事実を知った時に大きな衝撃を受けました。その後、学部3年次のゼミ論文から修士論文に至るまで、この風刺画が描かれたきっかけとなったポピュリスト運動の研究に没頭していきました。

修士課程を修了した後、会社員を経て博士課程に進学した際も、アメリカにおける人種分離を決定づけたこの運動を一貫して研究することを考えていました。つまりは、学部と修士課程で行った研究をより深く探求することが博士課程での仕事であると考えていたのです。法政大学の国際文化研究科は、そのように考えていた私の意識に大きな変革を与えてくれました。同研究科では、指導教員による研究指導を中心としつつも、研究科の教員全員で大学院生を指導していくことを伝統としており、年に一度行われる中間報告会では、様々な分野を研究する先生方から多くの助言を得ることができました。そして、この中間報告会に向けた準備過程のなかで、私たちは、「国際文化」という学問をどのように理解し、この学問分野における貢献について常に意識することが求められていました。それまで歴史学あるいはアメリカ研究をディシプリンとしていた私は、自分の研究を「国際文化学」のなかに位置づけることに苦戦していました。そのような過程のなかでたどり着いたのが、自分自身を研究の

道へと導いた「きっかけ」である図像そのものを研究対象にすることでした。博士課程では、本学会の顧問である熊田泰章先生に指導教員を引き受けていただき、非言語表現による言説形成の過程を考察することを博士論文のテーマとして研究を続けてきました。

歴史学の分野において、非言語資料を史資料として分析することは、その必要性が強調されつつも積極的に行われているとは言い難い状況にあります。しかし、「国際文化」という学問には、このような挑戦的な試みを行うことを許容する柔軟さがあることが利点であると考えております。それは、昨年7月の全国大会において風刺画の国際的な相関関係について報告させていただいた際にも痛感しました。同大会では、近接した分野に関心を有する研究者たちとの出会いがあり、とりわけ司会を務めていただいた多摩大学の安田震一先生の業績からは、今後進めていこうと考えている研究において多くの示唆を与えてくれると考えております。今後の研究では、これまでに行ってきた研究を著書としてまとめていくことを一つの目標としつつ、博士論文の主要なテーマのひとつである「ヘイト」をめぐる言説形成の過程を時代と国家を超えて検討していきます。時代と地域を横断しつつ、一つの事象を探求していく。このような視点は、地域研究の殻に閉じこもっていた「国際文化学」と出会う前の私には想像できなかったことでありますが、未熟ながらも教育と研究のなかでこの試みを実践していきたいと考えております。

専門分野:

- アメリカ史(20世紀転換期の人種表象)
- 国際文化研究(風刺画描写における表現様式の国際移動)

著書:

- 『国際文化研究への道—連帯と共生を求めて—』彩流社、2013年5月(共著)など。

【募集】全国大会の自由論題

- 自由論題は原則として個人研究発表ですが、内容により複数の発表者による発表も可とします。いずれも発表時間は質疑応答も含めて30分とします。質疑応答の時間が十分とれるよう、発表時間の目安を20分程度としてください。
- 応募は日本国際文化学会の会員に限ります。ただし現在学会会員でない方は、申し込みと同時に会員登録を行うことにより資格を得るものとします。
- 応募は、氏名・現職(大学教職員・有識者・企業や団体・研究所等の場合は所属と肩書き、大学院生・学生の場合は在籍課程などを明記)・連絡先・自由論題発表題目・キーワード(3～5語)を冒頭に記し、発表要旨(40字×25行以内)をつけて、2019年3月末までに全国学会実行委員会事務局までメールにて提出をお願いいたします。メール: intercultural_2019@ml.nagasaki-u.ac.jp

【募集】第9回平野健一郎賞

「第9回平野健一郎賞」の募集を開始しますので、多数のご応募をお待ちしております。

応募に関しては学会ホームページの「平野健一郎賞規程」をご覧ください。

(<http://www.jsics.org/hirano.html>)

- 応募締め切り 2019年4月30日
- 応募書類 応募書類は審査後に返却いたします。
- 応募結果の発表 第18回全国大会総会において発表し、授与式を行います。
- 応募先 日本国際文化学会事務局宛て
〒252-0805 神奈川県藤沢市円行802番地
多摩大学グローバルスタディーズ学部
TEL:0466-82-4141 email: jsics@gr.tama.ac.jp

会費納入のお願い

- 年度末が近づいてまいりました。2018年度の会費納入がまだの方は、お振込みをお願いいたします。
- 振り込み用紙がお手元がない場合は、郵便局のお振込み用紙をご利用ください。その際、ご所属・連絡先・お支払の会費年度のご記入をお願いいたします。

- 学会会費(4月～翌3月末までの年度会費額)

正会員	10,000円
大学院生	5,000円
学部生	2,000円(学会誌は別途購入)

【振込先口座番号】

ゆうちょ銀行 00210-2-138408
日本国際文化学会

※平成25年度総会により、年会費(10,000円)の支払いに困難を覚える者は、常任理事会宛に会費の減額(5,000円)を申請できることとなりました。希望者は、学会事務局まで理由書をご提出ください(書式自由)。

※他行等からの振込先口座番号は下記のとおりです。恐れ入りますが、振込手数料はご負担ください。

会費の未納・滞納は、学会運営に大きな支障をきたします。何卒ご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

ゆうちょ銀行
店名:〇二九(ゼロニキュウ)店(029)
当座 0138408

2020年度以降の全国大会に関して

第79回常任理事会(2019年1月5日、静岡文化芸術大学にて開催)において、2020年度以降の全国大会開催校の呼びかけをすることとなりました。中長期的なリスト(3か年計画等)づくりに着手し、開催校のみならず学会も、それぞれが見通しを立てて準備ができるようにしたいと思います。また、全国大会を所属大学・学部研究科等で活用していただける場となればとも願っています。いつ頃という明確な見込みがなくてもかまいませんので、ご関心がある会員におかれましては、まずは4月末までに学会事務局あるいは三役(会長、副会長等)に一度ご相談・ご連絡いただきたく、お願いいたします。なお、それ以後も引き続き全国大会開催にご関心がある場合は、随時、学会事務局にご連絡をお願いいたします。